

# 音楽科鑑賞授業において 児童が感受したことの言語化を促す手立て

学籍番号 239338

氏 名 加藤 彩音

主指導教員 兼平 佳枝

副指導教員 浦田 恵子

## 1. 問題意識と背景

小学校の音楽科教育では、音楽を聴いて音楽を形づくっている要素を聴き取り（知覚）、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取り（感受）ながら、知覚と感受の関わりについて考える学習が求められている。こういった中で、実習校で授業を観察したところ、知覚したことを言語化することはできるが、感受をしたことを言語化することに戸惑っている児童が多少見られた。このような、感受したことを言語化することが困難であるという課題に対し、先行研究では物語づくりや身体表現を用いた方法が提案されている。しかし、それらの汎用性や組み合わせの実践が行われておらず、実習校の児童がどのような手立てによって感受したことを言語化することができるようになるのかという問題意識を持った。

そこで、本研究の目的を、小学校音楽科の鑑賞授業において、児童が感受したことの言語化を促すための手立てを明らかにすることとした。

研究の方法として、まず知覚・感受と言語化について、本研究におけるさまざまな言葉の語意を規定する。次に、先行研究を通じて児童の感受を促す具体的な手立てを整理し、理論的視点を基に研究授業を計画・実践する。最後に、研究授業の結果を分析し、そこで得られた分析結果をもとに、感受したことを言語化するための手立てを明らかにする。

## 2. 音楽科授業における感受したことの言語化

まず、知覚・感受とは、音や音楽を聴いて、音楽を形づくっている要素やその要素の関連を聴き取り認識する知覚と、音や音楽を聴いて、「○○な感じ」や「～みたい」と言い表すことのできる、音や音楽の特質や雰囲気を感じる感受を関連づけて行うことである。

先行研究の整理によって、児童が感受したことの言語化を促す手立てとして次の事柄が考えられると明らかになった。1つめは「図形楽譜」や「身体表現」といった活動を取り入れることができること、2つめは教師による発問や会話が影響を及ぼすこと、3つめは特に言語化が難しい児童に対しては言葉や表情カードなどの選択肢を与えることができることである。そして、それらの手立ての有効性を確かめるためには、児童のワークシート等への記述に限らず、児童の発言や児童同士のやり取り、身体の動きなども含めて分析することができるとわかった。

### 3. 研究授業の計画・実践・分析

先行研究の整理に基づき、次の様な授業を検討した。まず、取りいれる手立ては、身体活動やワークシートの工夫、今音楽のどのあたりを聴いているのかがわかるように分数を表示するといった手立てとした。今回はブラームス作曲《ハンガリー舞曲 第5番》を教材とし、指導内容は「強弱と速度」で計画した。

そして、授業分析においては、まず逐語記録やワークシートを元に、抽出児童となる山尾（仮名）が感受したことを「〇〇な感じ」や「～～みたい」のように言語化している場面を抽出した。さらに、理論的視点を元に以下の2点を分析の視点として設定し、授業分析を行なった。

(ア) 音楽を聴いてどのような感じをとらえているか

(イ) 感受したことが言語化された要因は何か

### 4. 結論と考察

研究の結果、本研究授業において児童が感受したことの言語化を促す手立ては、以下の4点であることが明らかになった。

- i 他の児童と考えを共有する場を設定すること
- ii 「感じたことを書く」のではなく「音楽に合いそうなフリ(身体の動き)を考えて書く」のように、児童にとってわかりやすい発問をすること
- iii 他の児童の記述を取り上げて、児童が感受したこととは何かを具体的に理解することができるように促すこと
- iv 感受したことを身体の動きで表す前に、音楽に合わせて実際に体を動かす活動を取り入れること

これらの手立てによって、児童が感受したことの言語化を促すことができた。

その一方で課題もいくつか見られた。まず、感受したことを記述する場面において、授業者が児童の躓きに気づくことができなかった点が課題として挙げられる。具体的には、感受を問う場面で、強弱や速度の変化について記述している児童が多く見られたため、児童は知覚と感受の違いがわからないという躓きがあったと捉えられる。その要因は、これまでの授業を観察する中で感受と知覚の違いについて何度か触れていたこともあり、本研究授業ではその違いについて説明することがなかったことだと考えられる。この点については、児童が何を理解しているのかを授業者が十分に理解する意識を持ち、児童の理解に合わせて都度説明をするといった指導上の工夫が必要だと言える。

さらに、児童の思考に沿った展開にすることができなかったことも挙げられる。児童一人ひとりに感受したことを言語化させてから身体の動きを班で1つ決めるという展開の中で、「一人で考えたものはなんだったのか」という児童の発言が見られた。そのため、児童が授業の中でどの様に考えているのか、何を思っているのか、という視点をもって授業を検討・展開することが必要だと言える。

以上より、児童が感受したことの言語化を促すためには、児童が考えを共有する場の設定など授業検討も必要だが、その授業を受ける児童がどのように思考するのかといった児童の実態を理解して授業を実践することが必要だと考えられる。